

本講義資料のご利用にあたって

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。

著作権が東京大学の教員等に帰属する著作物については、非営利かつ教育的な目的に限り再利用することができます。

ご利用にあたっては、以下のクレジットを明記してください。

クレジット：

UTokyo Online Education 学術フロンティア講義 2023 中島隆博



花する空気

東大EAA学術フロンティア講義「30年後の世界へ——空気はいかに価値化されるべきか」

2023/4/14

中島隆博(東京大学)

要旨

「空気の価値化」を考える際に重要なことは、誰にとってという問いを問うことである。すぐさま人間にとってと答えたいくなるのだが、人間以外の存在者にとっても、空気は重要である。人間と人間以外、あるいは人間の中に引かれた分断線を乗り越えるような「価値化」を空気を通じて行うことが求められている。それは人間の再定義から始まるだろう。それをHuman Co-becomingもしくはHuman Co-floweringという新しい概念のもと、一緒に考えてみたい。

存在が花する

「花する」とは聞き慣れない言葉である。これはもともと、井筒俊彦「イスラーム哲学の原像」にある、「存在が花する」に由来する。井筒は絶対無限的な存在が自己限定して「花する」というダイナミックな世界観を示そうとした。それに触発されて、「空気が花する」もしくは「花する空気」と考えてみたいのである。

* 井筒俊彦はイブン・アラビーの「哲学的世界像」を次のように要約している。

このメタ言語では「花が存在する」とは申しませんで、日本語としては妙な表現になりますが、「存在が花する」とか、「ここで存在が花している」とかというような形でなければならないのであります。とにかく、この哲学的メタ言語では、あらゆる場合に存在が、そして存在だけが主語になるべきであります。他のあらゆるものはすべて述語です。このように理解された「存在」、つまり絶対無限定な存在そのものを頂点において、その自己限定、自己分節の形として存在者の世界が展開する。イブン・アラビーの哲学的世界像を最大限に単純化して考えますと、だいたいこのような形になると思います。(井筒俊彦「イスラーム哲学の原像」、『井筒俊彦全集』第五卷、慶應義塾大学出版会、二〇一四年、四九五～四九六頁)

わたしたちは「空気の価値化」について考え続けている。それは単に物質としての空気に従来考えられてきた価値を付与することではない。たとえば、清潔な空気や安全な空気を考えることができるが、それは清潔さや安全といったすでにある価値を空気に与えているにすぎない。無論、このコロナ禍では、清潔な空気や安全な空気がどれだけ貴重かをわたしたちは学んだ。それは個々の家庭だけでなく、より公共的な空間においても要請されるものだ。しかし、それはAir Conditioningすなわちエアコンという枠組みにおいて考えるということだ。問われているのは、人間にとっての新しい価値であり、それに空気がどう寄与するかということだ。

価値

その際、価値とは何かという問いは、非常に重要になってくると思います。COVID-19のパンデミックではさまざまな課題が浮かび上がっていますが、私が見るところでは、実は既に知られていた諸問題があらためて露呈してきたように私には見えます。既にわかっているながらも、私たちがうまくマネージできず、手をつけることもできなかった諸問題です。それに加えて、日本も含めた世界各国の対応を見ていきますと、COVID-19に対する意思決定のあり方もまた非常に問われています。そういったことを踏まえて、これからの新しい社会のあり方をどのように構想していくのか。とりわけ、人間の生(ライフ)の価値をどう深めていくのか。これらを問うことが、私たちにとっては喫緊の課題ではないでしょうか。

中島隆博編『東京カレッジ連続シンポジウム「コロナ危機を越えて」③価値』(東京大学国際高等研究所東京カレッジ、2020年)9頁

人間の生にどう関わるのか

「手入れ」の行き届いた環境のもとで生み出される「空気」は、では人間に、とりわけ人間の生にどう関わるのか。空気を通じて、人々が花することが目指すべき境地であるが、その手前で、たとえば身体に対しては、「養生」つまり生を養うことに貢献することが期待できる。

西平直『養生の思想』（春秋社、2021年）32-33頁参照

わたしたちの生は身体的な側面と精神的な側面があるため、養形（身体）と養神（精神）に分けることがある。荘子は後者を重視したという解釈から「ようせい」をより精神的に考え、「ようじょう」を身体的だと考える理解もあるが、本書はそれを取らない。身体と精神の両側面は分離できないからだ。

貝原益軒の『養生訓』が本書の原点である。それは養生を「気を養う」こと、つまり気の循環を促し、気を新陳代謝させることだと理解した。そのために必要なことは、「節制」そして「**楽**」である(6～7頁)。欲望を適度に節制しつつ、楽しみを決して失わない。それは「いささか」の贅沢を楽しむことなのだ(101頁)。堅苦しい完璧主義ではなく、穏やかな調和が目指される。したがって、著者は次のように述べる。「その思想は、例えば、儒教倫理を土台とした近代日本の「健康」思想とは大きく異なっていた。「**お国のために役立つ**」義務としての健康には、「**楽**」の視点が欠けていた」(109頁)。

西平直『養生の思想』(春秋社、2021年)参照

近代日本では、養生から衛生へと大きくパラダイムが変化した。**個人のための養生から、国家のための衛生へ**である。『養生訓』もまたその文脈でのみ理解され、国への忠を尽くす書物として読まれた(142頁)。コロナ禍の現在、わたしたちは依然として義務としての健康と国家のための衛生というパラダイムの中にいる。ここで決定的に欠けているのは、**養生を通じて楽しむという視点**なのだ。「**まことの樂は、人とともに楽しんでこそ**」(207頁)と著者は指摘する。豊かな生が養われるとき、それは個人の枠を超えて、環境や周囲の人とのつながり自体が豊かになるのだ。それは決して国家がその健康を管理する個人の事柄ではないのである。養生という柔らかな概念に、著者の控えめな語り口を通じて、是非触れていただければと思う。

西平直『養生の思想』(春秋社、2021年)参照

まことの楽を楽しむ



→生を養い、まことの楽を実現する。
これこそが「花する空気」の目指す
具体的な境地である。

西平直『養生の思想』(春秋社、2021年)207頁参照

Human Co-becoming

これまで人間はHuman Beingとして理解されてきた。つまり、人間存在である。井筒の言い方を借りれば、「存在が人間する」ということだ。しかし、このきわめて西洋近代的な人間理解には問題がある。それは、人間を存在という「本質の中の本質」に閉じ込めてしまい、人間に備わっている生成変化のプロセスを見ずにすませているからだ。人間は人間的になりゆくプロセスにあるものではないか。こうした問い直しが東洋哲学からなされている。それは人間をHuman Becoming、つまり人間的になりゆくものと見る見方だ。それは人間の不完全さや限界を見据えるもので、人間中心主義とは真逆の態度である。わたしはそれをさらに、Human Co-becomingと言い直している。それは、人間が人間的になりゆくためには他者とともにあることが不可欠だと思ふからである。他者との交わりの中で、人間ははじめてそのあり方を変容させ、人間的になりゆく。これは存在という本質や実体に価値を置くことと異なり、関係や繋がりに価値を置くことだ。これこそが、人間にとっての新しい価値の軸である。

Flowering or Flourishing

Human Co-becomingはHuman Co-floweringでもある。徳倫理学の語り方では、人間が人間的になりゆくこと、すなわち幸福を、floweringとかflourishingという概念で記述している。それに倣えば、「人間がともに花すること」が今日的な課題であり、新しい価値の軸なのだ。より具体的なイメージを喚起しておこう。山内志朗『湯殿山の哲学』にこのような記述がある。

桜は襞を展開して開花させる。徳倫理学は幸福を開花 (flourishing) として捉える。小さな花も大きな花も、自らの花を開花させるべく存在を移ろう。花が開花するのは、実を結ぶためではない。だからこそ、花は「何故なしに」咲く。

普遍的な尺度や客観的な基準を満たすべく花が咲くのではない。花は花であり、自らの襞を展開して開花を実現する。そして、月山は多くの山襞から構成され、湯殿山はその一つの襞なのである。

山内志朗『湯殿山の哲学- 修験と花と存在と』(ふねうま舎、2017年) 51頁

エネルギーとキネーシス

ここで重要なことは、「花する」が外在的な目的(普遍的な尺度や客観的な基準)のためではなく、内部に折り畳まれた襞を現実に展開することとして捉えられていることだ。人間が人間的になりゆくこともまた、襞の現実化なのだ。山内はこの襞の現実化を「エネルギー(現実活動態)」というギリシア語で記述しようとする。それは外在的な目的を備えている「キネーシス(運動)」とはまったく異なるものだ。

山内志朗『湯殿山の哲学- 修験と花と存在と』(ふねうま舎、2017年)205-206頁参照

山内志朗

キネーシスは、歩行のようなもので、目的を備え、目的に到達する限り、歩行がその目的にいたる手段としてある。目的地に着かない歩行は無意味である。歩行はそれ自体では無意味である。他方、エネルゲイアは舞踊のようなものであり、その行為はどこにいたるというものではない。どこに行くことがなくても、その内に目的を常に実現しているので、行為の外部に措定される目的に到達しなくとも、常に完成している。舞踊は常に目的に到達しているのであり、常に「踊り終えている」のであり、完成しているのであり、どこで終えようと不完全ということがないのである。キネーシスは目的への到達によって消え去り、エネルゲイアは目的の中にとどまる。アリストテレスは、そのようなエネルゲイアの典型として「人生」を挙げる。エネルゲイアとしての人生！

山内志朗『湯殿山の哲学- 修験と花と存在と』(ふねうま舎、2017年) 205-206頁

アレルゲイア

わたしたちの人生は、舞踊のように、いつでも完成し続けるエネルギーである。人生を生きることそれ自体が目的であって、何か外側に人生の意味があるわけではない。しかし、ここでわたしはエネルギーに変えて、アレルゲイアという造語を用いたい。それはアラ(他なる)＋エルゴン(働き)であって、「他者ととともに花する」ことを強調したいからである。人が花するには、どうしても他者との交わりが必要なのだ。その内部の襞を展開するにも、人は自らの力だけではできない。あくまでもHuman Co-floweringでしかないのである。

自然のエレメント

さて、問題は空気である。人間の新しい価値の軸が、Human Co-floweringにあるとして、空気はそれにどのように寄与するのだろうか。もう一度、山内志朗『湯殿山の哲学』を参照してみよう。

「花」は自然のエレメントだ。いや、世阿弥が能の藝に見出した「花」という概念は、自然の中に留まるのではなく、世界そのものに適用できる。メルロ＝ポンティは、地・水・火・風というエレメントに「肉」を加えた。「肉」は地・水・火・風と同じような具体性とリアリティと身近さを具えているからだ。エレメントは抽象的なものではなく、身近でなければならない。その意味では「花」はエレメントに加えるのにふさわしい。

山内志朗『湯殿山の哲学- 修験と花と存在と』(ぷねうま舎、2017年)34頁

*

四大(ギリシア、インド、仏教):地(土)、水、火、風(空気)

五行(中国):木、火、土、金、水

「空気」という概念

福沢諭吉『窮理図解』(1868年)「空気」 窮理から物理への移行 しかし、「気」は残り続ける。

「気」の概念系:①物理的な原理 ②精神的な原理(プネウマ、プシュケー、氣息)

気は人間を含む自然界を構成する原理であり、陰と陽の二気として出現し、その相互作用によって万物が生成変化する。中国思想にとって、この陰と陽の二元性は決定的な特徴と言えるものだ。

アンヌ・チャン『中国思想史』(知泉書館、2010年)644頁(解説 中島隆博)

人間は「肉」を所有するのではなく「肉」を生き、そして「花する」。肉と花という新しい二つのエレメントを支えるのが、地・水・火・風(空気)という古いエレメントだ。空気は地・水・火というエレメントとともに、肉と花を生き生きしたものにする。空気が肉となり花となるのだ。

言い換えるならば、分子が様々に結合した実体としての空気だけではなく、肉であり花である人間を条件づけるものとしての空気もまた問われているのである。より正確に言えば、それは、「空気感」とも呼ばれるような人間の関係性を条件づけるものだ。そうした空気こそが他者との関係を条件づけ、Human Co-floweringに寄与するのである。

Human Conditioning

想像してみよう。清潔で安全な空気を共有した空間において、人々が関与し合い、心の交わりを深めている姿を。そこでは、孤独の影が取り払われ、身体を通して心が触れ合い、新たな言葉を手にいれ、自分の声を誰かが聴いている。その人の襷が花開き、それだけでこの世界に善さを付与するのである。これはすでにAir Conditioningだけの世界ではない。空気は人間関係を適切に条件づけて調和させるHuman Conditioningにまで深く関わっているのだ。

社会的共通資本

社会的共通資本という概念が効いてくるのは、まさにここにおいてである。人々がともに花することを支え、適切に条件づけるものとしての空気は、放っておいて生まれるものではない。それは新しい人間の価値をよく理解した専門家集団によって担われなければならないものだ。宇沢弘文は『社会的共通資本』において、こう述べている。

社会的共通資本は、それぞれの分野における職業的専門家によって、専門的知見にもとづき、職業的規律にしたがって管理、運営されるものであって、政府や市場の基準・ルールにしたがっておこなわれるものではない。この原理は、社会的共通資本の問題を考えると、基本的な重要性をもつ。社会的共通資本の管理、運営は、フィデューシアリー (fiduciary) の原則にもとづいて、信託されているからである。

社会的共通資本は、そこから生み出されるサービスが市民の基本的権利の充足にさいして、重要な役割を果たすものであって、社会にとってきわめて「大切な」ものである。このように「大切な」資産を預かって、その管理を委ねられるとき、それは、たんなる委託行為を超えて、フィデューシアリーな性格をもつ。社会的共通資本の管理を委ねられた機構は、あくまでも独立で、自立的な立場に立って、専門的知見にもとづき、職業的規律にしたがって行動し、市民に対して直接的に管理責任を負うものでなければならない。

宇沢弘文『社会的共通資本』(岩波書店、2000年) 22-23頁

〈コモンズ〉としての空気

公共財ではなく

たとえばイタリアのナポリ市では、2011年に住民投票で水道事業の再公営化が決定し、水道事業を自治体と市民団体の代表による共同管理によって維持することになりました。この事例はヨーロッパで注目されています。というのも、水道事業の再公営化を契機にナポリ市がコモンズの権利を定める法案を採択し、水をナポリ市民にとってのコモンズとして共同管理することを法的に規定したからです。私有財産、公共財とは異なる第三の財産としてのコモンズの権利が保障されたことが画期的です。

中野佳裕「ポスト資本主義コミュニティ経済はいかにして可能か？——脱成長論の背景・現状・課題」、中島隆博編『人の資本主義』（東京大学出版会、2021年）

Human Co-flowering

「ともに花する空気」という「大切な」ものを信託されていること。これこそが専門家集団にとっての責任の原点である。そうした空気をきちんと手入れし続けることによって、新しい人間的価値であるHuman Co-floweringを実現すること。これがよりよい社会に向けて貢献することにほかならない。